
男の嫉妬

t e t u

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

男の嫉妬

【Nコード】

N9761Y

【作者名】

t e t u

【あらすじ】

自動車の教習指導員とそのクラスメートが車内で昔の話をする。

義人は本物の自動車免許を持っていないのにも関わらず、車の運転していた。というのは、免許をとるために路上教習を受けていたからである。時刻はまだ午後の四時半であったが、季節が季節だけに辺りは薄暗くなっていた。マフラーを巻いた通行人が吐く白い息。コンビニの緑と赤を基調とした一足早いクリスマススの飾り。街の至るところで冬が顔を出していた。

「それにしてもさ、お前が教官をやってるなんて考えもなかったよ」

義人は、自分の息で両手を温めながら言った。方向指示器の音がカチカチと鳴っている。車の中は暖房が効いているが、ハンドルが冷たいのだ。

「別に好きでやってるわけじゃない」教官は答えた。彼は義人の元クラスメイトであり、教習指導員にしてはまだ若い方であった。「これに限らず、仕事なんて大っ嫌いだ。教えるのは好きなんだけども。信号、青になったぞ」

「同じ教えるなら、学校の先生になればよかったじゃないか」義人は、難なく右折をこなしながら言った。「数学……っていうより小生のときだから算数か？ お前、すっげー得意だったろ？ 俺も算数だけには自信あったけど、お前には一生かかっても勝てないな、って思ったもん」

「世辞はいいよ。それよりも、ちゃんと前を見て運転してくれ。二回目だからって、調子に乗っていると痛い目に合うぞ。そもそも、免許の更新なんて忘れるなよな」

「仕方ねーだろ、マジで忘れてたんだから。ていうか、俺の話はいいよ。それよりもお前の話だ」

車は街から離れ、田舎の方に向かっていった。徐々に強まってい

く暗闇をヘッドライトは照らし続けていた。

「お前は夏目先生みたいな教師になればよかったんだよ。少しは覚えてるか？ あの人のこと？」

「夏目奈々先生、だろ？」若き教習指導員は言った。「忘れるわけないだろ。二年連続で担任だったんだから」

「まあ、そうだろうけどよ。一応、訊いてみたんだ」義人は、雑な運転をしながら言った。「いい先生だったよな、今にして思えば。あのころは教師同士を比較するなんていう発想がなかったけど。まだ生きてるかなあ？」

「さあな。でも、まだ50かそこらだろ。生きてるんじゃないか、多分」

「50になった夏目先生か。見たくねえな」

「そんなこと言ってやるなよ。好きだったんだろ？」

「ばーか。何でそうなるんだよ」義人は顔を赤くして言った。

「恥ずかしがらなくてもいいだろ」教官は次に曲がる方向を指で示しながら言った。「小学生の男子が、優しくて美人でいい匂いのする女先生を好きになる。至って普通の現象さ。そもそも、あれぐらい年頃の子は、みんな、無条件で教師を好いてしまうものさ」

「そういうもんかね。じゃあ、お前も？」

「もちろん、好きだったさ。今でもたまに夢をみる」

「たまにって、具体的にはどれぐらい？」

「さあな。夢を見た回数なんて、よく分からねーけど、年に二、三回ってとこかな？」

「うえっ。数字がリアルすぎて気持ちわりーよ」

「普段は忘れているのに、何故か、ふっと夢に出てくるんだよな。その夢に限ったことじゃないけど。……それにしても、君は真面目に運転する気がないみたいだな。判子、押さないぞ」

「んなこと言っても、横にお前がいるのに、いつも通りに運転するなんて無理に決まってるだろ。右良し、左良し、をやれているのか？」

「分かった、分かった。じゃあ、もう好きにしてくれ。時間までには学校に戻ってくれよ」

「おっ、いいのか？」

「よくはねーよ。万が一、上から何か言われたら、お前に責任をなすりつけるからな」

「おっけー、おっけー。じゃあ、腹が減ったしコンビニでも探そうかな」

「さすがにそれは止めてくれ。目立ちすぎる。おれの首が飛びかねん」

結局、教習車は、畑が横にある道路脇に止まった。義人は、一度、体を伸ばすために外に出たが、寒くなってすぐに車内に戻った。彼の同期生は、椅子をやや後ろに倒して、まるで葬儀場の死人のようにお腹の上で手を組んでいた。痩せた体型のせいかな病人のようにもみえ、本当に死人のようだった。

「さっきの話だけど……」義人は、暖房の微調整をしながら言った。「夏目先生の夢って具体的にはどんな夢を見るんだ？ やっぱり、実際にあった出来事か？」

「やけにこだわるんだな。ふーん。君がそんなに入れ込んでいたなんて知らなかったよ」

「だから違うって言ってるだろ。いや、好きは好きだったんだけど先生がどうこうじゃなくてさ。なんていうか、その……嫉妬なんだよ」

「嫉妬？」

「だからつまりな……」義人は、椅子のカバーを爪でげじげじと引っかきながら言った。彼に煙草を吸う習慣があったのなら、おそらくは一服していただろう。「そうだなあ。あれは、たぶん算数の授業だったんだろうな。こういうことをやっただろ。一分は六十秒。一時間は六十分だから60かける60で三千六百秒」

「ああ、それならよく覚えてるよ」教官は、懐かしむように言った。「一日は24時間だから、3600かける24で、えっと……三万

六千が二つに、七千二百が二つだから……」

「相変わらず、不思議な計算方法だな」

「べつに珍しいやり方じゃないぞ？」

「まあ、いいよ。数字なんて適当で。分かりやすく十万秒ぐらいにしておこう。んで、一年が365日だから、だいたい三千万秒。そして最後に……、人の寿命が平均して80年ぐらいだから、まあ、100歳をかけて……ざっと三十億秒か」

「ちょっと概算をしすぎた感はあるけど、大体、そんなもんだろうな。だけど、それが何だって言うんだ？」

「ああ……それで……」義人は本題に入った。「その計算式と答えが黒板に書かれて、そのあと夏目先生が皆に向かって、その時間が長いと思うか短いと思うかって訊いただろ？ 人生は三十億秒。それが長いか、短いか。まず最初に、長いと思う人は手を挙げてー、と先生は訊いた」

「みんな手を挙げたな」

「そう、お前以外はな。そこで先生が、短いと思う人、って言ったとき、お前は高らかに手を挙げた」

「おれだって良く覚えているさ。周りの目がぜんぶ集まったんだから。それで？」

「その前に訊いておきたいんだが、何でお前は、短いと思う人って言われたときに手を挙げたんだ？」

「もちろん、そう思ったからさ」

「だから、どうしてそう思ったんだ？」

「……はあ。それを説明しろっていうのか？」教官は、いかにも面倒くさそうに言った。仕事中の教習指導員に煙草を吸う権限があったのなら、彼はそうしていただろう。「そうだな。色々理由はあがるが、一つは数的感覚のせいかな。あのぐらいの歳の子は、三十億なんて数字を滅多に見ない。だから、いきなりそんな数字が飛び出してくると、どうしてもインパクトに負けてしまう。だけどおれは幼少の頃に、宇宙に関する本をよく読んでいたからな。大きな数字

には慣れていたんだ。歴史の本も好きだったから、大きな数字にピントを合わせるのには上手かったと思うよ。とはいえ、いま考えてみれば的外れなピントだったと思うけどな。三十年生きれば、百年は三倍するだけでいいけど、十歳の子にとっては十倍しなきゃいけないんだから、当然といえば当然だよな」

「……それだけか？」

「もちろん、他にも理由はある。もう一つの大きな理由は……たぶん、こっちの方が大きな理由だろうけど、おれが自閉症だったからだろうな」

「お前が自閉症？ そんなふうには見え…、いや、確かにお前には変な所がいっぱいあったけど……」

「まあ、あれだ。最近、よく耳にするんじゃないか？ アスペルガーって言葉。ようするにそれなんだよ。まあ、おれも知ったのはつい最近だし、それを知ったところで自分が変わるわけじゃないから、あんまり詳しく調べてないんだけどさ」

「それで？」

「うん。それで、さっきの話に戻るけど、多分、おれと同じように数字のインパクトに圧倒されなかった子も、いるにはいたと思うんだ。宇宙の本を好んで読んでいたのは、おれだけじゃないだろうし」

「だけど、誰も手を挙げなかったじゃないか」

「ああ、それなんだ。おそらく、一人だけ仲間はずれになるのが怖かったんじゃないかな。体面的な問題もあるけど、それ以上に精神的に。だが、おれにはそういうものはない。それがアスペルガー全員の特徴ってわけじゃないけど、影響はしていると思うな。一人ぼっちになることよりも、自分に嘘をつくのが嫌なんだ。自分がマイノリティ側の意見を持っている場合には、なおさらね。まあこれは歴史の本の影響もあるだろうけど」

「……まだ他にも理由があるんじゃないか？」

「おいおい。勘弁してくれよ。そりゃあ、深く分析すれば出てくるだろうけど、はつきり言って疲れたぜ。もう充分だろ」教官は左手

で窓を開けて、外に白い息を吐いた。暑かったり寒かったりして、冬の空調管理は忙しい。「それよりもお前が話せよ。何でこんな話をさせたんだ？　ていうか、もともと何の話をしたんだっけ。……ああ、そうそう、夏目先生の話だ」

「べつに夏目先生のこと死ねほど好きだったってわけじゃないけど……」今度は義人が話す番だった。「やっぱり俺、意識してたんだな、今にして思えば。ああ、そうだ。俺は先生のが好きだった。だから、誰よりも先生の挙動を注視していた。そんな俺だから分かるんだよ。……先生がお前を鼯屍にしてたって」

「鼯屍？　そうだったか？」

「ああ、いや、普通の目でみれば、確かに夏目先生は公平だったよ。良い先生だからな。だけど、嫉妬深い俺の目には、先生がお前を鼯屍しているようにしか見えなかったんだよ。それが、ごく僅かな差だったとしても」

「それは……仕方ないことだな」

「……アスペルガーだったっけか？　よく分かんねーけど、ようするにお前は生まれつき特別なんだろ？　きっと、その特別さが先生の目に留まったんだな。お前は本当に変なやつだった。世の中にはニセモノの変人がたくさんいるけど、お前はモノホンだった。先に言うておくが、俺はお前のことが嫌いだったわけじゃないぞ。だけど、やっぱり心の底では煮ええたぎっていたんだな。いまは、お前を殴りたくて仕方ない」

義人は、左手で右の握りこぶしを押さえつけていた。教官は、義人の性格をよく知っていたので、本当に殴ろうとしているわけでないことは分かっていた。

「妬みほど、やり場のない感情もないよな……」教官は左に目を背けながら言った。「だけど、こんな話はもう止めないか？　どこまでいっても、子供の叶わぬ恋。いや、恋というのもおこがましいよな、ちっばけな話じゃないか」

「……ああ、そうだな」

その後には、長い沈黙が続いた。エンジンと暖房だけが、一定の調子で音を出していた。

「もうそろそろ、いい時間帯だ」教官は、頃合を見てそう言った。

「このまま大通りまで行つて、それから元の道まで戻ろう」

教習車は、大きな音をたてて発進した。辺りはすっかり暗くなっていたが、街に戻っていくにつれ、明るい建物や車が増えて、いくらかマシになっていった。交差点の信号に捕まっているときに、空からチラチラと真っ白な雪が降ってきた。初雪だった。

やがて車は教習所に着いて、指定の位置に収まった。義人が車のドアを開けると、顔に小さな雪が降りかかった。

「じゃあな。俺はまだ仕事があるから。あと数回で本試験だな。落っこちなよ」

「おい、ちょっと待てよ」義人は教官を止めた。通りがかった一人の若い女性が、義人の口調に驚いて振り向いたが、それでも止まらずに歩いていった。「一つ、訊いておきたいことがある。というか訊いておかなきゃ気がすまないな」

「なんだ？ 寒いから早く戻りたいんだが」

「お前は……、お前は、どれぐらい、先生のことが好きだった？」

義人の顔は、これ以上にならないほど真剣だった。両腕は、ただ、ぶらんと横に提げ、目は食い入るように、教官を見つめていた。

「そうだな……」義人の友は、そうつぶやいた後、十秒以上も考え込んだ。「大好きだった。お前と同じくらい。いや、多分お前以上に」

「……そうか。……ありがとう」

義人は友人に礼を言った後、自転車置き場の方に向かって歩いていった。

教官は友人を見送った後、腕を組みながら教習所の建物に入ってしまった。そして彼は、夏目先生のことを本当に心の底から好きだったような、そんな気持ちになったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9761y/>

男の嫉妬

2011年11月29日16時51分発行